

「学校教育と色覚——色覚の多様性を理解する」

高等教育コンソーシアムみえ受託事業 「令和元年度 高等教育機関と連携したダイバーシティに関する講座」

開催日時・場所： 2020年1月14日(火), 16:30~17:50, 鈴鹿大学B棟302講義室

講師： 林 羊歯代 (NPO 人にやさしい色づかいをすすめる会)

色覚異常の人は周りが思っている以上に不安ではないのだと感じた。それは生まれつきそのように見えているため、ある程度不自由もなく暮らしてきたからだを考える。大事なのは、周りが過剰に心配することや、不安になるのではなく、色覚異常について本人と一緒に知っていき、助け合って生きていくことが大切なのではないかと思う。とても驚いたのは、医者の子が色覚異常と知り離婚という話である。もっと日本ではマイノリティーについて興味深く関心を持ち、助け合い支え合うべきだ。

色覚についての検査を高校生の時にススメられたが、不安で断ったことがある。そのことを思うと、もっと誰もが検査を受けやすいと感じるように色覚についてのポスターなどを養護教諭は作成するのが良いのではないかと思う。食物アレルギーについて知っている人は多いが、色覚異常についての知識は学校関係者だけでなく、日本全体がまだまだ知らない人が多いため、どのようにしたら知ってもらえるか考え、発信していけたらと思う。配慮は、チョークの色に気を付ける、分かりづらい色同士を使用しないなど、普段から心がけていきたい。

色の見え方や男女の比率など知らないことが多かった。特に男性にとっても多いことに驚いた。細かく色を見分けられるというのは体験するまで全く知らなかった。たしかに黄緑が蛍光の黄色に見えたりしたし、紫でも濃い色から薄い色まで様々あった。

体験学習では、P型(バリエーション)を体験し青と黄色の世界を見、赤がない景色を知った。色弱者の見分けづらい色の組み合わせの理解(例:赤と黒、茶と緑、青と紫など)、カレンダーの色の見え方、信号の色の見え方と運転時の慎重な心がけ、夜の街のネオンの見え方など、主に疑似体験を通じて色覚の多様性に共感することができました。

私自身が子どもの頃には何度か色覚の検査を行った記憶があります。現在検査をするか否かで議論になっている事を知り驚きました。プライバシーの問題等、昔は意識されなかった事が意識されたのは良い事ですが、事実を知らないまま成長し、夢を諦めなくてはならないという現実の方が本人にとっては酷な事だと思います。大切なのは事実の知らせ方と知った時の受け止め方ではないかと思います。妊娠時からの知識の提供や、検査を親と子の両方の意思のもと行う制度など方法は色々と考えられるように思います。

私の父は色弱者です。たまに「これ何色？」と聞かれることがあります。何も卑下した事はないし、父は写真展にも出展し人生を楽しんでいます。この授業を受講して父の事を良く知れた気がします。貴重な体験を教育現場でも生かしていきます。

人の色の見え方は細かくちがうんだなと思いました。メガネをかけて色を分けてみたら、全然自分が思っている色とちがっていたのでおどろきました。普段自分はちゃんと見えているので何も気にしていなかった。これからはこういう見え方をしている人もいると思って、教師になったらちゃんと理解したいと思いました。

色覚について詳しく症状や体験を通して知ることができて良かった。自分があたり前に見えているものが見えにくかったり、見えないという人もいることを考えると、今まで受けてきた授業はそんな人々に対する配慮はなかったように思い返せた。なので、これを機に自分が何かを発信する時には、色づかいに配慮したものを作るようにしていきたい。

色覚異常の人たちは、不便をあまり感じないため、自分が色覚異常だと気づきにくい。就職が困難になったりする事例を聞き、早く気づかせてあげる必要があると思いました。私が中学校や高校の時は色覚異常の検査は無かった

です。その時代にあまり徹底されていなかったんだなと思いました。2003年頃は色覚異常の生徒が多くなく、差別や偏見を持たれることから色覚検査がなくなったと知り、少ない、むしろクラスに1人はいると思った方がいいし、検査は徹底した方がいいと思いました。差別や偏見をもたれないように、教師がその子に対しての配慮や、どの色がどのように見えているのかを理解してあげることが大事だと思いました。

学校で色覚検査を行うことで色覚異常と診断された児童生徒を教員が把握でき、進路選択や日常の授業でも細やかな対応が出来ると思った。しかし色覚異常は遺伝であり、極めてプライバシーの高いことだとわかった。また、差別やいじめに繋がる可能性もあるため、色覚検査は個別で検査したり、結果の通知の仕方を工夫したりする必要を感じた。「色弱者」は今の社会では色に弱い存在だが、これからカラーユニバーサルデザインが進んで色弱者が色に弱くない日がくるべきだと思った。

色弱に対してただ色がみんなとは違う風に見えるだけだと思っていたが、とても深いものだと思います。小学校で気づくことが多いと思うので、気をつけるべきだと思います。パワーポイントなど赤になっていることが多いので、色弱の方にとっては何が重要かわからない。本人より親の方が責任をかかえてしまうというのはとても痛いところだと感じました。

色弱者について、赤とか黄だけ見にくいんだろうなと思っていたけれど、もっともっと幅広ということを知った。自分は今まで色覚検査をしたことがないから、自分が一般色覚者なのかもよく分からないし、どういった検査方法なのか分からないけど、色弱者の人たちも私たちと同じように毎日過ごしていて、とても興味深いと思った。だれがなってもかしくないけど、そういった人達もすしやすい学校をつくりたいと思った。特に子どもで自分が人と違うと感じている時に気づいてしまう子どもでできてしまうかもしれないので、養護教諭を志望する身として、日々何をしたらより良くなるか考えていこうと思った。

色覚異常など、呼び方が差別のように感じさせてしまうかもしれない。

色覚異常というのを知らず生きてきて就職時に発覚して職につけないというのを見て、それはとても辛く、もっとは

やく知っていればと思うだろうなと思った。大きなししょうは生活の中でないかもしれないけど、大人になってずっと追いかけてきた夢が叶えられないことはなくすべきだなと思ったので、色覚検査は行っていくべきだと思った。自分のことを知るということは、辛い思いをするかもしれないけど大切なことだと思う。そして色覚異常をもつ方に対しての接し方もよく考えて行動、発言していこうと思った。

色覚を異常なもの、病気だと認識していたけれど、色の配慮の不十分な社会における弱者として「色弱者」と呼んでいる。その方が差別的でなくて良いと思った。10人に1人は保因者だと聞いて驚いた。クラスにも1人2人いて当然と思っておくべきだと思う。カレンダーや信号は生活の中にあるもので困ると思った。信号については改善されていても、まだ足りていない。自分の夢を突然、諦めなくてはならないのは苦しい。早いうちに検査を行いたい。

自分でも知らずに「色弱者」となっていしまっているのは、私には考えられないが、すごく苦しいものだと思う。私は幼い頃に知っておきたいなと思った。今回受講したことで、色弱者は色がない世界でかわいそうだなと思っていたけど、詳しく聞いたことで、少し違う世界を見ているだけなんだと知った。

今日の話聞いて全然違う折り紙を重ねていたりしていて本当に一番ビックリしました。色弱ってどんな色に見えるという話じゃなくてそれよりもっと深い話だったので、すごく興味を持って話を聞くことができました。

色弱についての検査をしていない世代は、就職時に初めて判明すること(大きくなるまで分からないことに驚いた)。

受講を通じて、三重県環境生活部に[ダイバーシティ社会推進課]という新しい課ができたことを初めて知った。ダイバーシティとは[多様性]であるが、全国でこのネーミングを用いて取り組みをスタートさせたのは三重県が初めてだそう。それらの取り組みについて書かれた冊子には、スマホで読み取る音声コードがついており大変便利だと感じた。

受講中には「バリエントール」という眼鏡型特殊フィルターを使用し、色彩の多様な見え方を実際に体験した。体験を通じて「色の多様性」の意味を理解することができた。また、色弱者の方が日常生活においてどのような点で不便を感じているかということを知り得ることができた。LEDの信号機

は比較的見分けがつくけれど、夜間の電飾に紛れ込んでしまうとわかり辛いことや、赤い生肉を焼く際にはどうしても焼き加減がわかり辛いということなど、身近な具体例から理解することができた。

色覚検査については、子どもの頃、全員が保健室で検査した記憶があるが、現在では希望者のみの任意制となっている。検査様式が変更になった背景には、検査を通じて結果を知り得た当事者たちの意向や考えなどが汲まれているのであろう。しかし、当事者間でも検査のあり方についての意見は様々だ。生活に大きな支障がないのであれば、差別やプライバシー侵害に繋がりを、わざわざ検査で掘り起こすことはないとする意見に対し、検査を受ける機会を全く与えられず大人になり、職種によっては就職活動時に変更を余儀なくされた事例から、検査は受けるべきとする意見に分かれる。相反する意見であるが、そのどちらの理由にも納得はできる。

もし、我が身に置き換えて考えた場合、予期せぬ事実を突然突きつけられたらどうだろう。現代医療でどうすることもできないのであればあえて知りたくなかったと思うかもしれないし、ショックで暫し呆然とするかもしれない。もし、自分の子どもだったらと考えた場合、当然ショックであろうが、早い時期に判明する機会を得たいと思うだろう。何故なら、そのほうが医療機関や専門家からのアドバイスを受ける機会が増え、個々に応じた配慮や人生の設計、社会参画なども考えていくことが可能だからだ。これは色弱者だけに限らず、ハンディキャップを抱えて生きている人全てに置き換えて考えることができる。

色覚検査を反対とする意見のひとつとして、学校での検査で揶揄され辛い体験をした方の映像が流れた。本来ならば、揶揄するほうが絶対的に間違っている。しかし、悲しいことに少数派が肩身の狭い思いをしていることが圧倒的に多い世の中だ。それらを変えてゆこうとする流れが「ダイバーシティ社会」の実現である。社会の中で生き辛さを感じている人が、安心して生活できるような世の中にする為には、一人ひとりが多様性についての理解を深め、時には意識改革が必要だ。また、柔軟な子ども時代から学ぶことにより、身の周りにある身近なこととして捉えられれば、よりスムーズに社会変容する近道だろう。

多様化への共感能力を高めたりキャパシティを広げる為には、学校で学ぶ機会を得たり、社会での体験を通じて学んだり、家庭でも理解ある意識に触れられるかどうかにもよると思う。ダイバーシティ社会への取り組みは、未来によ

りよい種まきをするようなものでそれが浸透した時には今より思いやりある社会が構築されるだろう。

※ 以上は、すべて鈴鹿大学こども教育学部養護教育学専攻の学生さん13名による感想です(後日、「教職概論」をご担当の川又俊則教授に受講ノートとして提出されもの)。学生さんと川又教授の許諾を得て、全員分をほぼそのまま引用させていただきます。ここに記して感謝申し上げます。

(2020/04/27 作成, 報告者:林 羊歯代)